

「卒業生答辞」

皆様、本日はお忙しい中、私たち高3生卒業式にご出席いただきありがとうございます。少しずつ春の気配が感じられる今日3月1日、中学・高校と過ごしたこの逗子開成とも、ついにお別れをする日を迎えてしまいました。思い起こせば、私たちの学年は何かとアクシデントに見舞われることが多く、6年前からさかのぼると、雪の中の中学入試、嵐の中の入学式、学級閉鎖による開成祭不参加、遠泳の中止や中学卒業式の中止、しまいには先月の大学入試も記録的な大雪に見舞われ、最後までとことんハプニング続きの学年でしたが、今日は逗子開成の名にふさわしい快晴となりました。

さて、このたび卒業生を代表して答辞を読むという大役をいただき、私自身にとって逗子開成での6年間の生活は何だったのか、改めて振り返ってみました。

私は中学入学より、剣道部に所属していました。中学剣道部での生活は、同学年にライバルもいて、彼に負けまいと必死に練習し、刺激のある毎日でした。しかし、入部当初より、私の学年の部員はわずか数名で、しかもみな中学卒業までに、それぞれ他に熱中することを見つけ、部を去っていき、最終的には私ひとりになりました。

高校に上がる時、剣道を続けるか辞めるか悩みました。正直に言えば、最初、私は剣道部を退部するつもりでした。練習自体厳しく、クラスの友人との楽しい時間と比較し、部活自体つまらないと思っていた時期でもありました。また反抗期だったため、顧問の先生に対し反発心も持っていました。しかし、同学年の仲間と、練習や試合を通して友情を深めていくという、他のクラブでは当たり前のことができない寂しさが、一番の理由でした。 ですが、悩んだ末、最終的に、自分は剣道部に残りました。その理由は、自分でもよくわかりません。部を去って行った他の部員のように、他に情熱を注げるものがなかったこともあります。ただ、一つ言えることは、このまま部を辞めるのは、ただ辛さから逃げているだけだと思いました。後ろ向きの気持ちで決めたことは、その後もずっと辛い後悔を残し、たとえ他のことをやっても心から楽しめないままになりそうな気がしました。そうして、部に残留したのですが、しばらくして一人の環境に慣れてくると、今までの自分は、同学年との関係ばかり意識して、他学年の先輩や後輩、顧問の先生に対し、心を開いて接しようとしていなかったことに気づきました。その後、意識を変え、自分から積極的に関わろうと心がけたことで、自然と互いの距離が縮まっていくのを感じました。それ以前の私は、ただ剣道の腕を磨き、自分だけが強くなることしか考えていませんでした。しかし、先輩や後輩との間に連帯感が生まれ、仲間のためにも負けられない、逃げることはできないと思うことで、本当の意味で自分が強くなれることを、学ぶことが出来ました。結局、私は最後まで剣道部を続けました。この3年間は、決して順風満帆ではありませんでしたが、あの時の自分の選択に、今は一片の悔いもありません。机の上では学ぶことの出来ない、責任感や、自分らしさを貫くことの大切さ、支えてくれる人のありがたさを、自分は知ることが出来たと思っています。

さて、高2の皆さんは、4月からいよいよ高校3年生になります。偉そうに聞こえるかも知れませんが

が、先輩としてひとこと言わせてください。これからの1年の中で、いよいよ高校生活の集大成として、最後の行事となる体育祭や、部活の引退を迎えることとなります。悔いのないよう、全力で立ち向かってください。そしてそれが終わると、いよいよ卒業を控え、将来の大きな選択に直面することになります。色々不安になったり、妥協したくなったりすることもあると思います。ですが、その時は、真剣に自分自身の心を見つめ、本当に自分らしい選択をしてください。逃げる気持ちで選んだ道の先にあるのは、つらい後悔だけです。本当の自分らしさを見失うことほど、つらいことはないと思います。たとえ苦しくても、妥協することなく貫いた道の先には、たとえ結果はどうであったとしても、後悔はないんじゃないかと思います。あくまで前を向き、未来を見つめて、頑張ってください。

そして保護者の皆様へ。 私たちは普段は素直にありがとうと言えませんが、来る日も来る日も朝早く起きて弁当を作ってくれたり、体育や部活で汚れてしまった服を洗濯してくれたり、本当に大変だったと思います。そんなにも迷惑をかけているにもかかわらず、親の気持ちが理解できず、反抗したりすることもありました。しかし、温かい親の支えがあって、今の自分たちがあるということを、私たちはいつも強く感じていました。そして、今度は少しでも早く、私たちが親の支えになれるよう、人生経験を積み、一人前の男に成長していきたいと思います。

そして、先生方。いろいろご迷惑をお掛けしました。

いま考えてみると、ばかなことばかりして注意されることが多かったですが、それでも先生方は根気強く私たちを指導し、常に情熱を持って私たちに接してくださいました。行事などでは、ただ上から指示を出すだけではなく、生徒と一緒に苦しみも喜びも分かち合おうとする姿が、本当に強く心に残っています。そんな先生方に憧れて、いつしか自分も将来は教員になりたいと思うようになりました。もしできることなら、大学卒業後は教師として、この学校に戻ってきたいと思います。そのときはまたご迷惑おかけしますが、どうかよろしく願います！

そして、高3のみんな。

自分は本当にいい仲間恵まれたと思っています。何をしてもみんなの存在が学校生活を楽しいものにしてくれました。男だらけでむさ苦しく、華はないけれど、教室はいつも笑いに包まれ、飽きることのない毎日でした。この学年は個性的な生徒が多かったですが、一人一人のかけがえのない個性が溶け合って、確かなひとつのチームだったと思います。私はこの仲間たちと卒業できることを誇りに思っています。

みんなのおかげで、本当に、最高の高校生活でした。

最後になりますが、これから私たちはそれぞれの人生の旅に出ます。もしかしたらその旅路の先には、困難が待ち構えているかもしれません。ですが私たちは、風に吹かれ波にもまれながら、決して屈することなく、その苦しみを乗り越えることで、生きる強さを身につけ、自分だけのかけがえのない人生を歩んでいきたいと思います。旅の行き先はそれぞれ違いますが、みな逗子開成という港から旅立った仲間です。またいつか集まって、最高の旅の話を知りたいと思います。

最後までご静聴ありがとうございました。みなさまに心よりの感謝を込めて、卒業生を代表して答辞に代えさせていただきます。

平成26年3月1日
卒業生代表 佐々木 毅